

とっどりの元気な農業・農村の取り組み事例  
～農業委員(会)の主体的な取り組みから～



平成 23 年 3 月  
鳥 取 県 農 業 会 議

## はじめに

中山間地域等においては、担い手の高齢化や耕作放棄地の増加などにより、農業・農村は大きく変貌しようとしています。

一方、平成21年の農地法の改正等により、農業委員会の役割と機能はこれまで以上に重要となってきています。

このような中で、農業・農村の活性化に向け、農業委員や農業委員会が主体的に取り組み、成果を収めている事例も生まれてきているところであります。

本会では、このような事例を取りまとめ、県内の中山間地域等の活性化や農業委員の日頃の活動支援等に活用していただくことができるよう、各農業委員会に事例の照会を行ってきました。

残念ながら、報告された事例は少数となりましたが、農業委員や農業委員会が、農地法を中心とした農地行政の法令業務のほか、日頃の農地の有効利用や農業者の元気アップに向けた相談・支援活動の中で、それぞれ主体性を発揮しながら、地域に密着して取り組んだ明るい事例を取りまとめることができました。

関係機関・団体におかれましては、業務の参考にしていただければ、幸甚であります。

# 目 次

1 『農業委員、児童に農業を伝授』 （鳥取市農業委員会） .....	1
2 『遊休農地を解消し、学童体験農園として活用』 （鳥取市農業委員会） .....	3
3 『耕作放棄地解消に向けて』 （岩美町農業委員会） .....	5
4 『センチピード導入による草刈労務の軽減』 （若桜町農業委員会） .....	7
5 『「ちず☆ちづ朝市 in 智頭街道出店」』～鳥取智頭街道軽トラ朝市出店～ （智頭町農業委員会） .....	9
6 『鳥取で婚活！琴浦くるくるツアー』 （琴浦町農業委員会） .....	1 1
7 『南部町学校給食等食材供給連絡協議会の取り組み』 （南部町農業委員会） .....	1 3
8 『次世代に残す農業を目指す「農業に夢を！農業に未来を！」』 （南部町農業委員会） .....	1 5
9 『念願の農業委員会だよりの発刊』 （大山町農業委員会） .....	1 7

# 1 『農業委員、児童に農業を伝授』

鳥取市農業委員会

## 1 事例の分類（地産地消・食育関係）

## 2 事例対象の名称及び所在地

若葉台小学校農業体験（鳥取市紙子谷）

## 3 地域の概要及び周辺環境

旧鳥取市の南西部に位置し、鳥取市最大の邑美平野の南西端。古くは稲が盛んであったが、現在は兼業化が進み離農する農家も増えている。

一方、1名の担い手が20ha以上集積してその受け皿となっている。付近には国道29号線が南北に走り、20年ほど前からニュータウンや工業団地が作られ、市街地に接した農業地帯である。

## 4 取り組みの経緯

平成10年頃、ニュータウン内にある鳥取県畜産農協よりニュータウン内の若葉台小学校が行う農作業体験学習への協力要請が近くの農業委員にあり、以後継続している。

## 5 取り組みの特徴

農業委員が管理する18アールの圃場で若葉台小学校の五年生（約100名）が毎年農作業体験。田植え、水性生物の観察、カカシの設置、稲刈り、脱穀など年間を通して稲作を学び、12月に収穫祭を開き餅つきとともに学習発表会をしている。

普段の圃場の管理は、農業委員が行っているが、小学生の農作業体験の時は、鳥取県畜産農協の組合員や近くの環境大学の学生なども参加し、協力して支援している。

農業委員と畜産農協が互いによく連携し、日程等について小学校や環境大学と調整しながら取り組みを続けている。

## 6 今後の課題と展開方向

農作業は天候に左右されるが、授業の一環として農作業体験をしているので、予定を合わせることに苦労。

また、体験学習時のトイレ対策や脱穀までのスズメ対策のほか、今後、農業委員の加齢に伴い誰に引き継ぐかが課題。

## 7 農業委員が主体的に果たした役割、内容

圃場の管理全般、体験作業のスケジュール作成、学校等との調整



稲刈り体験風景

8 農業委員から一言

田んぼに入ったこともない子がほとんどで、独りでの米ができるように思っている子も多くいた。この農作業体験を通して米を作ることが簡単ではないことを感じているようだ。

本物の農業を知り、農業に興味をもってもらいたい。

9 農業委員会の意見

子供たちの感想文にも、農業委員への感謝の気持ちと併せて、農業の大切さや農業に対する興味、関心の高さなどが綴られており、成果を収めている事例である。

この農業委員は、この事例とは別に他の小学校3年生を対象にした梨づくり体験学習にも協力され、子供たちの食農教育に熱心に取り組まれており、食の大切さや農に関心をもつ子供たちの輪が広がっていくことを期待している。

## 2 『遊休農地を解消し、学童体験農園として活用』

鳥取市農業委員会

### 1 事例の分類（遊休農地発生防止・解消対策）

### 2 事例対象の名称及び所在地

鹿野小学校学童体験農園（鳥取市鹿野町鹿野）

### 3 地域の概要及び周辺環境

当該地は、鳥取市鹿野町のほぼ中央部、鹿野小学校横に位置する田である。周辺地域も、主に水稲による農業経営が行われている。

### 4 取り組みの経緯（動機、経過）

当該地は、農業経営をする者がいなくなり、長年、保全管理がされていなかったため、茅や灌木が生え、うっそうとした状態であった。そのような中、鹿野小学校が、近隣での水稲による学童体験用の農園を探しており、15アールの当該地の農地再生に取り組むことになった。



遊休農地

### 5 取り組みの特徴

県（東部総合事務所農林業振興課、農林総合研究所農業試験場）、市（農業委員会事務局・鹿野町総合支所産業建設課）及び地元農業委員が連携しての農地再生への取り組み。

再生作業は補助事業ではなく、地元公民館長も含め関係機関から10人が参加して実施。

1年目は、そばづくり、2年目は米づくりに取り組み、ほ場管理・栽培管理は3名の地元農業委員が行い、諸費用は収穫物代金で賄った。



再生作業（草刈）



再生農地

## 6 今後の課題と展開方向

今後も、食農の観点から、当該地を学童体験農園として活用するよう、関係機関が連携して支援していきたい。



学童農業体験（田植）



学童農業体験（稲刈）

## 7 農業委員（会）が主体的に果たした役割、内容

- ・ 農業委員による農地利用調整（地権者との賃貸借契約）
- ・ 農業委員会をはじめ、関係機関が連携しての再生作業
- ・ 農業委員による栽培管理と小学生への農業指導（田植・稲刈）

## 8 農業委員（会）から一言

再生作業に取り組んだことにより、その後、体験農園を通じて地域児童との触れ合いを深めることができた。

今後も、体験農園を通じた支援を継続して取り組むことにより、農業委員会の活動に対する地域住民の理解に繋がるものと考えている。

## 9 農業委員会の意見

遊休農地の再生の一つのモデルとして、他の地域でも取り組めるようにしていきたい。

### 3 『耕作放棄地解消に向けて』

岩美町農業委員会

#### 1 事例の分類 （遊休農地発生防止）

#### 2 対象集落の名称及び所在地 坂上地区（岩美町大字恩志）

#### 3 地域の概要及び周辺環境

坂上地区は、岩美町北東部の国道9号と蒲生川に隣接し、沖積平野として形成され、比較的平坦な地形で、水稻を基幹とした営農を行っている。

#### 4 取り組みの経緯

本地区は、区画が狭小かつ不整形で道路も未整備であり、大型機械の導入が困難である。また、農業従事者の高齢化、後継者不足が進み、農地の大多数が遊休農地となっていた。

その遊休農地の解消を図るため、どうしたらよいかと農業委員会で協議し、「さつまいもを植えてはどうか」との提案があり、19年度から取り組みがスタートした。

#### 5 取り組みの特徴

農業委員が主体となり地元小学校児童、地域住民を含め苗の植え付け、芋掘りを行い、収穫されたさつまいもを町のイベントで販売し、町民にPRした。

また、コスモスや菜種を栽培し、耕作放棄地解消を町民にPRした。



地域住民の協力による子供たちとの芋植え

## 6 今後の課題と展開方法

本地区だけでなく、本町の農業事情は耕作者の高齢化・農業人口の減少・若者農業離れが進行し、耕作放棄地が増えている。

なお、現地では、平成22年度から国・県の補助を受け、ほ場整備事業に取り組んでいる。

## 7 農業委員会が主体的に果たした役割、内容

農業委員会が主体的に企画から他機関等との調整、広報、栽培管理、収穫祭やイベント販売など各農業委員や地域住民の協力を得ながら手がけてきた。

## 8 農業委員会から一言

子供たちの喜ぶ姿がうれしい。子供たちにはいろいろな体験を通して、農業や食物への関心をもってほしい。

耕作放棄地を一時的に解消しても農業人口・若者が減少するような地域は何年後にまた耕作放棄地に戻ることにしはしないか心配している。



農業委員による耕作放棄地の草刈

町内イベントでの販売



## 4 『センチピード導入による草刈労務の軽減』

若桜町農業委員会

### 1 事例の分類（優良農地保全）

### 2 事例対象の名称及び所在地

湯原営農サポートクラブ（若桜町湯原）

### 3 地域の概要及び周辺環境

湯原は氷ノ山に端を発するつく米川沿いの傾斜地に存在する集落である。高畦という字名がある通り、水田の割に畦畔が広く、険しい場所によっては 7～8 m の高さもある。

平坦地の農業からみれば、棚田といっても過言ではない。水がきれいで、昼夜の温度差も大きく、米のおいしさは言うに及ばない。

しかし、高齢者にとって年間 5～6 回の草刈りは極めて重労働であり、危険な作業でもある。

### 4 取り組みの経過

本年 6 月、八頭農林局、若桜町との出前集落座談会で、地域の実態に即した農業を語るなかで、畦草刈りの軽減策が話題になり、その後も八頭農林局、若桜町と協議し、度重なる先進地視察、追跡調査研究等を通じ、若桜町の補助を受け、モデル地域として実施中。



### 5 取り組みの特徴

農業従事者の減少、高齢化、耕作放棄地の増加など、問題の多い農業。特に中山間地の社会を支える農業経営体質の強化を図ることを目指し、湯原営農サポートクラブを設立。水田畦畔の草刈り労力の軽減を図るため、センチピードの吹きつけを実施。

平成23年度は、本年度の反省を踏まえ、5～6倍の吹きつけを計画している。成功すれば、中山間地域の稲作労働軽減は計り知れない。

センチピードの法面



#### 6 今後の課題と展開方向

本年度の取り組みは、4～5月の除草作業と出遅れたが、クラブ員の熱意と努力により、今年の異常な高温にもめげず、ほぼ順調に推移している。

除草はセンチピードの吹きつけの成否を左右する重要事項である。クラブ員個々の研究心も高く、それぞれの研究結果を共有し、意思疎通を密にして、除草の時期、永年性雑草への対処方法、除草剤の種類、使用方法、使用時期の研究など、明るい方向に展開している。

#### 7 農業委員が主体的に果たした役割、内容

センチピードの吹きつけに向かうにあたり、まず足下を固めることから、同志の堅い輪を広げるため、先進地視察、継続的追跡調査、折りにふれて、問題解決のための協議会・研究会を開く等、クラブ員の結束を図るなど努力している。

また、若桜町農業委員会も、湯原営農サポートクラブの活動に関心を持ち、先進地視察を行うなど、成功を見守っている。

#### 8 農業委員から一言

除草が中山間地農業、環境に及ぼす影響等、これからの農業のあり方をクラブ員が共有する努力。若桜町モデル事業を成功させ、全町に広がっていく取り組みとしたい。

## 5 『ちず☆ちづ朝市in智頭街道出店』 ～鳥取智頭街道軽トラ朝市出店～

智頭町農業委員会

- 1 事例の分類（遊休農地解消対策・作り捨て野菜防止対策）
- 2 事例対象の名称及び所在地  
智頭町全域
- 3 地域の概要及び周辺環境  
智頭町での一般家庭の野菜づくりは、高齢者が中心であるとともに、作り捨て野菜が多い。しかしながら、高齢者は生きがい（元気老人対策）として毎日楽しみながら取り組んでいる。
- 4 取り組みの経緯
  - 鳥取智頭街道での新鮮野菜の販売が社会実験的に取り組まれたことから、農業委員会でも将来的に耕作放棄地で野菜を栽培し、軽トラ市に出店する農家や業者を育成したり、高齢者が毎日生きがいとしている野菜づくりで収入を得ることで、生産意欲の向上が図れるよう、取り組みの手始めとして、農業委員の自家栽培野菜を集荷し、軽トラ市で販売。
  - 集荷方法、値札、販売方法、売れ筋野菜の社会実験として取り組む。



軽トラ朝市の風景

## 5 取り組みの特徴

- 町が出店者を呼びかけ、9月～11月の月1回  
(第4日曜日8時～10時半)
- 出店者は、町内の農業生産者、加工品業者、建設業者、村おこし団体等と農業委員会軽トラ1回約20台程度
- 農業委員会は1台の軽トラで3回出店し、夏野菜～秋野菜及び新米等の販売をおこない完売した。
- 1回の平均出品数 約300品 《鳥取智頭街道軽トラ市》
- 〃 平均売り上げ 約3万5千円

## 6 今後の課題と展開方法

- 販路の拡大
  - ① 鳥取市内の軽トラ市を、年3回から増やしていき計画的に実施していく。
  - ② 現在神戸市内での野菜市を検討中で、今後計画的に販売していく。
- 生産者の確保  
町内での野菜づくりは高齢者が主体であることから、シルバー人材センターが中心になり、耕作放棄地等での野菜作りを検討。  
また、家庭での野菜づくりで、作り捨て野菜等の余った野菜を集約し販売野菜を確保する。
- 運営母体の確立  
智頭町ホンモノの農産物生産・販路開拓事業等運営等に係る母体組織を確立していく。(事務局、販売員、集荷手続き、配送等)

## 7 農業委員会が主体的に果たした役割、内容

今年度は、社会実験的な取り組みなので具体的な成果はないが、次年度に向け神戸へ販路先の交渉、シルバー人材センター・生産業者等に耕作放棄地での栽培協議等を行った。

## 8 農業委員会から一言

- 町と農業委員会が仕掛けて、民間で協力できる販売組織を立ち上げていく。
- イベント的でなく計画的に実施していくことで、高齢者の所得確保・生きがい対策となり、有休農地・耕作放棄地等の有効利用を図っていく。

## 9 農業経営者等の意見

- J Aに定期的に規格品を出荷していたが、規格外でも新鮮な野菜が販売でき農家の生産意欲向上につながる。

## 6 『鳥取で婚活！琴浦くるくるツアー』

琴浦町農業委員会

- 1 事例の分類 (婚活支援)
- 2 事例対象の名称及び所在地  
琴浦町農家担い手結婚対策事業実行委員会  
(琴浦町赤碕 1 1 4 0 - 1)
- 3 地域の概要及び周辺環境  
鳥取県の中部地域にあつて、スイカ・梨・畜産等を主体とし、県を代表する農業地帯である。
- 4 取り組みの経緯(動機、経過)  
町内の独身農業後継者対策が重要な課題であつたことから、農業後継者と独身女性等を対象とした交流の場を設定し、農業後継者の結婚活動機会の支援と定住促進を図る。
- 5 取り組みの特徴
  - 農業委員、普及員、町職員の 15 名で組織する琴浦町農家担い手結婚対策事業実行委員会が主体的に企画し、平成 20 年度から継続して実施。
    - ☆応募資格 : (男性) 町内在住の 20 ~ 40 代独身男性  
(女性) 20 ~ 40 代独身女性
    - ☆募集人員 : 男女各 15 名
  - 22 年度は「大地の男に嫁に来てごしなれ！」と題して募集。
    - ・男性は町内の農業後継者 14 名、女性は関西方面から 10 名と町内から 4 名が参加し、1泊2日で実施。
    - ・町特産の二十世紀梨狩りやアイスクリームづくり、乳搾り体験、バーベキューなどで交流を深め、4組のカップルが誕生。
  - これまでに、21年の県外女性参加者と町内の梨農家後継者のカップル1組がゴールイン。
- 6 今後の課題と展開方向  
いつまでも農業委員会が主体で行なうのではなく、民活を利用するものひとつの方法である。例えば町内の各種団体や企業を巻き込んだ



## 7 『南部町学校給食等食材供給連絡協議会の取り組み』

南部町農業委員会

- 1 事例の分類      その他（地産地消・食育関係）
- 2 事例対象の名称及び所在地  
南部町食材供給連絡協議会      （西伯郡南部町法勝寺170）
- 3 地域の概要及び周辺環境  
南部町のほぼ中央部に位置し、役場や病院もある。町の兼業農家率は87%で、農業生産は、水稻、梨・柿・いちじくなどの果樹、花卉、白ねぎなどの野菜、葉たばこ、畜産が主体で、特に梨と柿は県下でも有数の産地である。
- 4 取り組みの経緯（動機、経過）  
町内には野菜などの作物を生産している農家が多くある。  
しかし、これまでは、生産した作物の販売先は、町内3箇所の直売所と農協のアスパルのみであったため、直売所から離れた場所に住んでいる人や、移動交通手段のない高齢者にとっては、せっかく作った野菜の販売先がなかった。  
また、販売先がないために、作った作物を近所に配ったり、それでも残ったら捨てる、さらには生産を少なくしたり、止めてしまうなど、せっかくの生産者の意欲をそいでしまっていた。  
これらの意欲のある生産者にさらに生産に精を出してもらおうと、自分たちの孫らが通う保育園や小中学校の給食用の食材として提供し、児童の笑顔や家族内の会話を糧に、さらに生産に意欲をだしてもらいたいと平成16年度より取り組みを始めた。
- 5 取り組みの特徴  
学校給食等への食材供給を行うため、生産者個人と給食センター等の施設との間の橋渡しを行う協議会を立上げた。  
生産者から施設へスムーズな受け渡しができるよう、協議会で一括集配し、食材の質や量を確認している。また、生産者がこれから出荷できそうな食材を給食センターへ連絡することで、旬の食材を活用できるようにしている。  
協議会を毎月開催し、生産者同士、また生産者と給食センターの相互の意見交換の場を提供している。
- 6 今後の課題と展開方向  
旧会見地区は、旧西伯地区に比べ、協議会の会員数も少なく、出荷量も少ない。

しかし、実際には生産をされている方も多くいるので、集荷体制を整備することで、出荷量は増えてくると考えられる。協議会で重点的に旧会見地区を回って、会員を増やし、集荷をするようにしている。

7 農業委員（会）が主体的に果たした役割・内容

協議会の代表が農業委員、事務局長が元農業委員であり、地域の農業の振興、地産地消に積極的にかかわってきた。

8 農業委員（会）から一言

今までの取り組みにより、給食センターの地産地消比率は60%を超え、農家所得の向上にも貢献している。この取り組みを発展させ、地域を活性化させていきたいと考えている。

9 農業委員会の意見（事例の評価等）

農業委員会として、この取り組みを今後とも支援していき、農地の確保をはかり、地産地消を進めていきたい。



学校給食等食材供給連絡協議会の会合の様子

## 8 『次世代に残す農業を目指す「農業に夢を！農業に未来を！」』

南部町農業委員会

### 1 事例の分類（集落営農を優先した農業振興）

### 2 事業対象の名称及び所在地

清水川農事生産組合（西伯郡南部町清水川）

### 3 地域の概要及び周辺環境

集落農家数13戸のうち、どの農家にも後継者はなく、田畑をどうして保全していくのかということが、大きな問題となっている。すぐ近くに農事組合法人『福成』があり、そこに田を貸し付けている農家もある。

### 4 取り組みの経緯（動機、経過）

平成19年に立ち上げた『清水川農事生産組合』は、集落農家数13戸のうち、耕作放棄地を出さないという理念に賛同する9戸、耕作面積5.6haで出発した。

組合の立ち上げのときに、参加しないという方もいた。作業や機械を集約すれば、ひよっとしたら赤字の幅が少なくなるかもしれないと、かすかに期待する人もあり、何とか自分たちの手で田畑を保全してみようという9戸が集まった。

### 5 取り組みの特徴

#### (1) 直販ルートの開拓、ブランド米生産への取組

「儲かる農業を目指す」ことを目標に、消費者に直接販売するルートを開拓し、生産者が販売価格を設定している。また、ブランド米の生産のため特別栽培米とエコファーマーの申請をした。

米の生産が主力で耕作面積の8割を占め、残りはソバである。これは、9戸のうち3戸を除いて、サラリーマンが4戸、80歳以上が2戸で労働力不足が大きいことからである。

#### (2) 農作業の共同取組

農機具は、それぞれ個人所有のものを使い、オペレーター賃金を作業によって支払う方法である。いずれは、農機具も組合で購入し、組合所有へと変換していきたいと考えている。

共同で取り組んでいるのは、元肥散布・アゼシート張り・田植え・除草剤散布・農道と排水路の草刈・ミゾ切り・コンバインなど。あとの作業は、水管理を含めて田の所有者が行っている。

事業は、代表から顧問4役員で事業計画を作成し、その後全員で協議して進めている。



共同作業による農道・排水路の草刈り

## 6 今後の課題と展開方法

### (1) 作業受委託面積の拡大

2年後には、8 ha ぐらいまでは拡大できると考えている。

### (2) 一定量集荷できるハウス栽培作物

南部町の「いちじく」といえば、ある程度ブランド化ができている。需要に生産が追いつかない状態なので、ハウス栽培に挑戦してみたい。

### (3) 生産作物の販売

国道180号バイパスの開通に伴い、県道と国道が交差する地点で『夕暮れ市』を出店、販売してみたい。

### (4) 米の直接販売ルートの拡大

生産者が自ら値段を付け、保管庫を整備し、年間を通じておいしい米を販売する。

### (5) 組織力の強化

平成24年12月末を目標に、組織力強化のため法人化へ取り組む。確実に農地の保全ができ、かつ所得のアップが見込めなければ組合員の賛同が得られないので、一つずつ問題を解決していく。

## 7 農業委員（会）が主体的に果たした役割、内容

組合の代表が農業委員であり、この取り組みの先頭に立った。また利用集積について農業委員会として関わっている。

## 8 農業委員（会）からの一言

苦労してここまでたどりつき、成果を今後も継続するよう頑張っ取り組みたい。

## 9 農業委員会の意見

今後も継続できるよう、支援していきたい。

## 9 『念願の農業委員会だよりの発刊』

大山町農業委員会

1 事例の分類 (農業委員会の取り組み情報発信)

2 事例対象の名称及び所在地  
大山町農業委員会 (大山町赤坂)

3 地域の概要及び周辺環境

大山町は秀峰大山の麓にあり、自然豊かで観光・農業が中心産業である。農業では近年ブロッコリー栽培が盛んであり、京阪神に多く出荷している。

また、梨・りんごの果樹栽培、芝、水稻の生産も盛んである。また、日本海に面しており漁業も盛んで、山間部周辺では乳牛を中心とした酪農も盛んである。

近年、第1次産業は約3割にまで落ち込み、衰退傾向が顕著であるが、「大山恵みの里」構想のもと、第6次産業化を目指しており、道の駅の完成などにより進展しつつある。

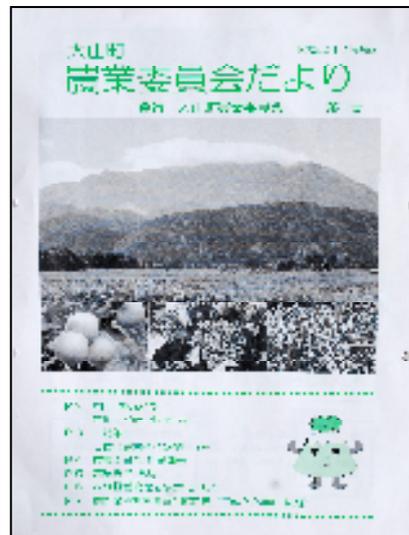
4 取り組みの経緯・方針

農業委員会の活動は不透明であるという町民の声もあり、委員会の取り組みを周知するとともに、委員会の重要性と理解をより深めてもらうことを目的に広報誌を発刊することとなった。また、方針として、下記をもとに制作を進めていった。

- ① 農業委員会がいつどのような活動を行っており、地区の相談・取りまとめ役として、農地を守っていくための重要な存在であることを町民全体に、再認識してもらえるような紙面にしていくこと。
- ② 農地法関連・農業者年金・全国農業新聞など、農業者の生産・生活に関っている事項の理解が、より深まるような紙面にすること。
- ③ 幅広い方に興味をもってもらえるよう、インタビュー記事などのコーナー部分を設け、文字も大きめにし、全体として読みやすい紙面にすること。

5 取り組みの特徴

農業委員自身での制作により、大山町初の農業委員会の広報誌を発行し、町民全戸に配布したこと。同時に町のホームページにも同じ内容を掲載し、広く情報発信を行ったこと。



## 6 今後の課題と展開方向

課題は認知度がまだ低いこと。

今後、認知度を上げるためにも、年1回の発行から、年2回に増やし、鮮度の高い情報発信をしていく予定。

## 7 農業委員（会）が主体的に果たした役割、内容

農業委員の中で編集委員を決定し、4回の編集会議を重ねる中で、そのメンバーを中心として掲載内容を決定し、インタビューや原稿作成を委員自身で行った。



## 8 インタビュー取材を受けた農業者の感想

インタビューを受けたことで、今後の農業への意欲が高まり、改めて家族みんなで取り組んでいこうという気持ちを再認識した。

なにより、久しぶりに親・子・孫、三世代で記念になる写真がとれてよかった。

## 9 農業委員（会）から一言

### <農業委員会会長>

農業委員会というのは、あまり町民に理解されていなかった点もあったかとは思いますが、これを機に、さらに期待されるような活動の展開に結びつけたい。

### <編集委員長>

今回、町からの要望もあり、また委員の念願であった広報誌を発行でき、うれしく思っている。今後、より紙面を充実させて、発展させていきたい。

## 10 農業委員会の意見

やっと発行の運びとなり、これにより、すでに発行されている市町村の情報発信レベルになってきた。まだまだ、広報誌としての認知度が低いので、内容とともに媒体自体の認知を高める工夫をしていかなければならない。